

幼児が高齢者に親しみを持つための絵本の活用Ⅱ

青木 聡子

キーワード：幼児，高齢者，世代間交流，保育，絵本

1. 問題と目的

(1) 高齢者に対する幼児の認識

拙論（青木，2022）で指摘したように，幼児にとって高齢者は身近な存在とはいえない。それよりもや若いことが予想される祖父母に対しては，多くの幼児（76.5%～91.6%）が好感を持っており，一緒に遊びたい，一緒に過ごしたいと望んでいる。自分の祖父母に対する印象については，4歳児が髪型などの形態面を多く挙げるのに対し，5歳児では「優しい，何か買ってくれる」といった性質や行動面を挙げるようになること，男女別に見た場合には，男児が形態面，女児が性質や行動面を挙げること（以上，日出幸・天富，2003）が報告されている。

幼児の祖母に対するイメージを規定する要因を性差，同居の有無，接触量，好きか嫌いかという点から比較した吉村・望月（1991）は，男児よりも女児に祖母に対してやや好意的な傾向がみられること，同居群では外見上の特徴を，別居群では内面的な特徴を強くイメージしていること，接触量が多い程ポジティブなイメージを抱いていることを明らかにしている。そして，幼児のほとんどが祖母宅を訪問すること（96.5%）や，祖母と外出すること（91.3%）を好んでいて，それらが好きな理由としては，物質的な要因（遊具・庭・ご馳走など）や祖母に付随した要因（いとこたちなど）よりも，祖母自身の魅力や祖母との接触を目的とした要因の方が重要であるという。

このように，多くの家庭で，幼児は祖父母と良好な関係を築いていることがうかがえる。ただし，幼児が遊び相手と見做す（日出幸・天富，2003）くらい元気で，その多くが50～60代である（金森，2012）の祖父母との交流では，高齢者という前提で接する場面はそう多くはないと考えられる。

では，幼児は，老いの先にある「死」の概念については，どのような認識を持っているのだろうか。杉本（2001）によれば，3～5歳の段階では，誰でも死ぬという「死の普遍性」について理解している子どもは39%にとどまったが，死が「体の機能の停止」を意味することについては78%，「死の非可逆性」については56%が理解をしており，「死の原因」にはどのようなものがあるかについても61%が具体的な回答を行っていたという。「死の原因」については，多くが外的原因（病気・事故・殺人・過労死等）を挙げており，内的要因（寿命・自殺・人類の必然性等）を挙げたものは1名のみで，死の概念的理解がほぼ獲得されるのは6～8歳頃であった（杉本，2001）。

子どもと「死」について話すことが大事だと考える親は，幼児期では79.8%，小学校低学年では90.1%，小学校高学年では83.8%であった。実際に話す際の配慮としては，幼児に対しては，「話すことは大事だが，恐怖とにならないように」「話したことはあったが，恐怖を感じていた」などと，死に対する恐怖という言葉が特徴としてみられること，「死や動物をいじめるなどの行動も見られる時期なので積極的に話すことが大事な時期」「命の大切さとして伝えた方がわかるのでは」「生から死までのサイクルとして話していきたい」など命とのつなげて伝えていこうとする姿が見られるのは，児童に対してであることが報告されている（以上，荃津・小林・井上・岩本・岡田・工藤，2009）。

以上のことから，幼児は，高齢者との交流経験そのものが少ないことや認知発達上の特性により，老いや死についての概念を獲得していく途上にいるといえる。老いや死についての理解を深める過程で，戸惑ったり，混乱したりする可能性があることを加味すると，保育の中で老いや死を扱う際には，子ども達の反応や園で行った援助について保護者と情報を共有し，家庭と連携しながら進めていく必要がある。

(2) 幼児と高齢者との交流に対する子育て世代の認識

子育てをめぐる母親と祖父の関係は非常に弱く、日頃、祖母が子どもにしてくれていることとしては世間的なことが多い（今野，1982）。母親は、幼児に対する祖父母の影響や子育てをめぐる自分と祖父母との関係について概ね肯定的であるものの、子どもへの祖母の過保護的態度や干渉的・抑圧的態度については不満や注文を抱いているという報告（今野，1982）からは、育児をめぐる価値観のずれが顕在化する程、祖母が孫の世話をしている実態がうかがえる。

祖父母との行き来は、専業主婦に比べて母親が就労している場合の方が頻繁で、電話でのやりとりにはそのような違いはみられない。幼児と別居の祖父母の交流内容で多いのは「食事をする」「一緒に遊ぶ」「テレビをみる」などの日常的な行為で、祖父に比べ祖母、特に母方の祖母はどの項目においても親密な交流を行っていることが明らかとなっている。多くの母親が「祖父母は子どもにやさしく接してくれる」と感じていて、祖父母は「子どもの育児にプラス」の存在であり、孫が「祖父母の生きがい」となっているという認識を持っており（以上、板野・花谷・奥山，1996）、交流について、幼児・親自身・祖父母、それぞれにとっての利点を見出していた。

では、子育て世代は、祖父母よりも上の世代を含む地域の高齢者との交流については、どのような認識を持っているのだろうか。乳幼児をもつ子育て世代にアンケート調査を行った富岡・杉本・並木・諸井（2012）は、子育て世代が望む親族以外の地域の祖父母世代との交流希望は祖父母世代との交流経験が多いほど高まることを報告しており、子どもを預かるという信頼関係が求められる直接的な支援を行うには、まず、祖父母世代との触れ合いや、何気ない交流や会話の中で得られる支援の経験が重要であり、そこから子育て世代が祖父母世代に対して心強い支援者という認識を深めていくことが、子どもを預けることにつながることを示唆している。

地域の高齢者と子どもが交流することについては、8割以上の幼児を持つ保護者が賛同しており、同居の祖父母に期待している、通園の送迎や家事手伝い、留守番や病気の子どもの看護といった親の育児行動の代替ではなく、地域特有の技術や文化の伝承を望んでいるという報告もある（日出幸・天富，2003）。交流を希望する高齢者の年齢は、60代後半をピークに、60歳代、70歳代が主であるものの、80歳代、90歳代にも及んでいて（日出幸・天富，2003）、「高齢期に特有の課題を抱える者全般」（内閣府，2018）を含めて想定していると推察される。そのうえで、高齢者との交流を「親が教えられないことを学ぶことができる」「老人を大切にす気持ちにつながる」「優しさや温かさが身に着く」「子どもの居場所が増える」「世代が離れるので老人は子どもをおおらかに見てくれる」といった、幼児にとって有意義なものとして捉えており、親自身にとっても「老いや死について子どもと話すきっかけになる」「子育てに余裕が持てる」「子育てを相談できる」といった面をプラスに捉えていた（日出幸・天富，2003）。このように、高齢者との交流に対し、親が前向きな姿勢を持っていることは、幼児が自分とは異なる相手の立場を理解しようとする際のよいモデルになることから重要である。

(3) 幼児との交流に対する高齢者の意識

乳幼児期の孫がいる50～60代の祖父母は、実際の孫育てによって【仕事や家事の削減】【仕事や家事の省力化】【孫に心を砕いた仕事や家事】【近距離仕事への転職】【趣味や地域活動の急なキャンセル】【趣味や地域活動の限局化】【困難になったスケジュール管理】【困難になった健康管理】を認識していることが明らかにされている（秦・高橋・坂本・和田，2021）。近年では、孫ブルーや孫疲れといった言葉も広まっており、育児の戦力としての役割を期待されるような交流には、複雑な感情が伴うようである。

一方、地域の高齢者は、子どもの成長や子育ての悩みについて相談を受けること、子どもの生活・文化に関する伝承を行うこと、遊びを通じた日常的な交流を行うことに関心があり、それらの交流は、子育て世代や孫世代との交流経験があるほど強く希望されるという（諸井・並木・富岡・杉本，2013；並木・杉本・富岡，2013）。そして、子どもの成長や子育ての悩みの相談を受けることや、しつけ的な内容の生活・文化伝承を行うことについては、居住地域に関わらず祖母世代の方が交流を希望することや、農村地域の祖父母世代は都市地域の祖父母世代よりも日常的な子どもとの遊びや交流を望むことが示されている（並木ほか，

2013)。したがって、保育のなかで幼児と高齢者が交流する場を設ける際には、できるだけ継続的な関わりを持ち人間関係を築けるようにすることが望ましい。

(4) 本研究の目的

拙論(青木, 2022)でも述べたように、幼稚園で高齢者との交流に関する絵本の読み聞かせを行うことは、高齢者に関心をもつことや、その特性に応じた関わり方を考えるきっかけになると考えられる。そして、高齢者と対面での交流活動を行う際にも、目的に合わせて選んだ絵本を活用することにより、一層の教育的効果が期待できるだろう。

本研究では、幼児が高齢者に親しみを持つための絵本の活用の仕方について明らかにするため、青木(2022)では取り上げなかった「(お)ばあちゃん」または「(お)ばあさん」が出てくる幼児向けの絵本を対象に内容分析を行い、保育での生かし方について検討することを目的とする。

2. 方法

本研究では、青木(2022)を踏まえ、絵本を幼児と高齢者との交流に向けた活動に利用することを想定し、国立情報学研究所(NII)が提供する情報サービス Webcat Plus で、2022年11月7日現在、「(お)ばあちゃん」「(お)ばあさん」のいずれかのキーワードに該当した作品のうち、次の4つの条件を全て満たした14冊について分析を行う。

条件1: 幼稚園児が負担なく読めるもの(読み聞かせを含む)。

条件2: 入手が容易であるもの。

条件3: 幼児(あるいは、それに準ずる幼い子どもや小動物等)と高齢者との交流の様子が描かれているもの。

条件4: 「①相手の気持ちを考えて関わること・思いやり」「②自分が役に立つ喜びを感じること」「③幼児の心を揺り動かすような経験」「④周囲の人たちと支え合って生きているのだと実感すること」「⑤共に楽しみ、共感し合う体験・社交性」「⑥相手の役に立つことをする経験」「⑦敬意」のうちいずれか1つ以上を含むこと。

その際、条件4の7つの視点から絵本を分類し(表1)、複数を組み合わせて教材として活用することを提案する。

3. 結果と考察

以下では、(1)高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本、(2)高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本、(3)高齢者への敬意が描かれた絵本、(4)死が描かれた絵本の順に、絵本の概要に触れながら内容分析を行い、その特徴を明らかにするとともに、幼児が高齢者に親しみを持つきっかけとなるような保育での生かし方について検討を行う。

(1) 高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本

はじめに、幼児と高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本について取り上げる。

『おばあちゃんから ライオンを かくすには』ヘレン・スティーヴンズ:作/さくまゆみこ:訳/ブロンズ新社/2014年/2015年

ライオンがいるアイリスの家に、両親の不在中、大好きなおばあちゃんが泊まりに来ることになる。「ライオンがいたら、おばあちゃんが こしを めかすでしょうからね。」(p.3)と、アイリスはなんとかしてライオンを隠そうとするが、いい場所が見つからないうちに「とっても おおきな いしょうばこ」(p.6)をもっておばあちゃんがやってくる。目が悪いおばあちゃんはライオンのことに全く気付かないが、おばあちゃんにも「なにか ひみつが ありそう」(p.17)で、アイリスはその秘密を探ろうとする。やがて、お互いの秘密を知ったふたりは、おばあちゃんの提案で「びっくりだいさくせん」(p.28~31)を行う。

『はやく あいたいな』五味太郎：作／絵本館／1979年

よおちゃんは、ある日、「急（きゅう）に おばあちゃんに あいたく」なり、さっそく出かけて行くが（p.4～5）、おばあちゃんも「急（きゅう）に、よおちゃんに あいたくなって」出かけて行ったため（p.6～7）、ふたりは何度も行き違ってしまう。とうとう会えたふたりは「ヤッホウ！おばあちゃん！」「ヤッホウ！よおちゃん！」と喜び合う（p.28～29）。

表1 幼児と高齢者との交流が描かれた絵本に含まれる内容

絵本の題名／作者／出版社／発行年	①相手の気持ちを考えて関わること・思いやり	②自分が役に立つ喜びを感じる	③幼児の心を揺り動かすような経験	④周囲の人たちと支え合っているのだと実感すること	⑤共に楽しみ、共感し合う体験・社会的性	⑥相手の役に立つことをする経験	⑦敬意
『おばあちゃんから ライオンを かくすには』ヘレン・ステューヴンズ：作／さくまゆみこ：訳／ブロンズ新社／2014年／2015年	○				△		
『はやく あいたいな』五味太郎：作／絵本館／1979年					○		
『いないいないばあさん』佐々木マキ：作／偕成社／2019年	△						
『おばあちゃんが ちいさかった ころ』J.P.ウォルシュ：ぶん／S.ランバート：え／まつかわまゆみ：やく／評論社／1997年／2004年					△		
『おばあちゃんとおんなじ』なかざわくみこ：作・絵／偕成社／2018年					○		
『おばあちゃんもこどもです』いもとようこ：作絵／金の星社／2020年		△				○	
『おばあちゃん、ほくに できること ある？』ジェシカ・シェパード：さく／おびかゆうこ：やく／偕成社／2014年／2019年	○	△	○	○	△	○	
『おばあちゃんがおばあちゃんになった日』長野ヒデ子：作／童心社／2015年							○
『おばあちゃんすごい！』中川ひろたか：文／村上康成：絵／童心社／2002年					○		○
『おばあちゃんのひみつのあくしゅ』ケイト・クライス：文／M・サラ・クライス：絵／福本友美子：訳／徳間書店／2012年／2013年			△	△			△
『ばあちゃんのおなか』かさい まり：文／よしなが こうたく：絵／好学社／2020年			○		○		
『おばあちゃんのおくりもの』キャリアー・ガラッシュ：文／サラ・アクトン：絵／菊田まりこ：訳／WAVE出版／2017年／2018年			○				
『さようなら、おばあちゃん』メラニー・ウォルシュ：さく／なかがわ ちひろ：やく／ほるぶ出版／2014年／2014年	△		○				
『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』ディック・ブルーナ：ぶん・え／まつおか きょうこ：やく／福音館書店／1996年／2010年改訂			○				

○…含まれるもの／△…自覚的ではなかったり、一部含まれていたりするもの

『おばあちゃんから ライオンを かくすには』は、アイリスとおばあちゃんが互いのことを思いやって、それぞれ秘密を抱えることから始まる。その秘密が、現実にはありえないような設定であるという点が、ふだん一緒に暮らしていないにもかかわらずそっくりなふたりのつながりをより一層際立たせている。

『はやく あいたいな』は、会いたいと思ったら、即、行動に移す、よおちゃんとおばあちゃんのすれ違いと再会の物語である。よおちゃんのおばあちゃんに会いたくてたまらない気持ち、おばあちゃんのおよ

ちゃんに会いたくてたまらない気持ちが画面いっぱいにあふれており、祖父母のことが大好きで、一緒に遊びたい・一緒に過ごしたいと願っている多くの幼児（日出幸・天富，2003）の共感を呼ぶだろう。

2作品とも、祖母と似た者同士の主人公たちの姿から、自分と祖母はどうだろうかと考え、祖母に対して親しみを持つきっかけ作りができる内容だと考えられる。

『いないいないばあさん』 佐々木マキ：作／偕成社／2019年

りょうのおばあちゃんは、一緒に歩いていると、いつも突然いなくなってしまう、毎回「ここよー」と、思いもよらぬところから現れる。最後の『おばあちゃん』よんでみたけど、へんじがない。』という件（p.25～）には、（いつもと違って）なかなか出てきてくれないおばあちゃんを必死になって探すりょうの姿が描かれるが、当のおばあちゃんは何事もなかったかのように「ばあーっ」と笑顔で現れ（p.30～31）、「えーと、ぼくのおばあちゃんって、こういうひとです。」（p.32）という語りで終わる。

りょうは、突然始まるおばあちゃんのいないいないばあに終始振り回されている。本気で心配したのに「ばあーっ」と笑顔で出てこられたら怒りを覚えてもおおしくなさそうだが、りょうは「ぼくのおばあちゃんって、こういうひと」（p.32）だと、ありのままのおばあちゃんを受け入れている。世代間交流を行うにあたっては、想像もしていなかったような相手からの反応を経験し、戸惑うこともあるかもしれないが、そんな時にこそ取り上げたい作品である。

『おばあちゃんが ちいさかったころ』 J.P. ウォルシュ：ぶん／S. ランバート：え／まつかわまゆみ：やく／評論社／1997年／2004年

本作では、ロージーが「ねえ、おばあちゃん」と呼びかけて注意を促す先にあるものを見て、おばあちゃんが「おばあちゃんが ちいさかったころ」の様子を語るとというやりとりが繰り返される。今とは違うこと、今と同じこと、どちらもあるなか、小さかったころの方がよかったかと聞かれたおばあちゃんは「いいや、そんなことはない！いまのほうがずっと たのしいよ。だって、いまでは あんたが いるんだから」と答える（p.32）。

おそらく、この作品を読んだ幼児は、自分も「おばあちゃんが ちいさかったころ」の話を知りたい、と思うのではないだろうか。おばあちゃんが、小さかった頃よりも今の方がよいと答える理由に孫である自分の存在が挙げられ、家族からの愛情を感じられる内容となっているため、小さかった頃の方がよかったと思っている祖母や祖父がいた場合には、孫への愛情を別途伝えてもらえるよう促したい。高齢者にとって、自分が小さかった頃の経験は比較的語りやすいとされることから、祖母以外の高齢者との交流の際にも導入として活用することにより、高齢者から昔の話を聞いてみようとする意欲につながると考えられる。

『おばあちゃんとおなじ』 なかざわくみこ：作・絵／偕成社／2018年

最初、なっちゃんは、おじいちゃんから「なっちゃんは、おばあちゃんによく にているなあ」と、いつも言われることに「ちょっと こまりがお。」で、「わたしって こんな かお？」（p.4）、「ぜんぜん にてないよね！」（p.6）と思っている。だが、おばあちゃんと一緒に遊んで、ふたりともたんぼが好きなこと（p.21）を知り、子どもの頃の話を知り、おばあちゃんも子どもだったことに気付くと（p.23）、「やっぱり ふたりは よく にているよ」というおじいちゃん言葉に「ちょっと うれしい かお」になる（p.27）。

今のおばあちゃんしか知らないなっちゃんには、自分がおばあちゃんに似ていると言われても、共通する要素など、さっぱり見当もつかなかったのだろう。「こまりがお」をしていることから、自分がお年寄りみたいに見られているのではないかと心配している節もある。幼児にとって、おばあちゃんは最初からおばあちゃんであり、なっちゃんのようにおばあちゃんにも子どもの頃があったのだという事実には驚くことも珍しくない。祖母との交流に先立って読むのであれば、『おばあちゃんのかぼちゃパイ』（芭蕉みどり：作・絵／ポプラ社／1992年）や『ピヨピヨ おばあちゃんのうち』（工藤ノリコ：作／佼成出版社／2016年）

のように、自分や家族が幼かった頃・若かった頃の話に触れる作品と併せて取り上げると、祖母に対し親しみを感じると共に、家族の愛情に気付くことにもつながるだろう。

(2) 高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本

幼児にとって、日常の家庭や地域社会の生活とは立場が変わり相手の役に立つことをする経験は大切である(文部科学省, 2018, p.191)。ここでは、幼児が高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本を取り上げる。

『おばあちゃんもこどもです』いもとようこ：作絵／金の星社／2020年

うさぎの3にきょうだいお母さんの日に向けてお母さんに書いた手紙を、相談ののってくれたおばあちゃんに見せに行くと、おばあちゃんは「きょうにだまりこんで、しくしくなきはじめ」(p.12)、泣きながら「おばあちゃんおばあちゃんっていわないでくれ！わたしだってこどもなんだよ！」と言って(p.14)、おばあちゃんのお母さんに会いたいと泣く。その様子を見た3きょう代いは「じゃあ、おばあちゃんもこどもなんだからおかあさんにおてがみ、かこうよ！」(p.18)と提案し、「もういちど、ぎゅーっと、だきしめてほしいです。」(p.21)と書いた「こどものおばあちゃんをなんどもなんども、ぎゅー(注：作中では長い波線)っとだきしめ」る(p.22～23)。

お母さんのことを思う自分たちの気持ちに寄り添ってくれたおばあちゃんにも、おばあちゃんのお母さんのことを思う気持ちがあることを知り、おばあちゃんがそうしてくれたように、自分たちもおばあちゃんに寄り添う、という姿からは、してもらってうれしかったことを相手に返すことの大切さが伝わる。高齢者という自分とは立場の異なる相手にどう接したらよいか戸惑った時などにこの作品を読むことで、自分なりに関わり方を考え、行動してみようとする姿を後押しできるのではないだろうか。

『おばあちゃん、ぼくにできることある？』ジェシカ・シェパード：さく／おびかゆうこ：やく／偕成社／2014年／2019年

大好きな「せかいいちすてきなおばあちゃん」(p.2)が、この頃「いろんなことをわすれちゃうみたい。」で、「なんでもないことがうまくできないひもある。」ため、オスカーは「ぼくにできることある？」とお手伝いをする(p.6)。おばあちゃんは「おとしよりのためのおうちへひっこすことになり」(p.8)、あたらしいおうちを訪問したオスカーは、今のおばあちゃんが置かれている状況について知っ

ていながら、自分にできることを考えて行動に移していく。

大好きなおばあちゃんが変わっていくことに戸惑いながらも大好きという気持ちは変わらないオスカーが、自分にできることをしていく姿は、高齢者との関わり方のモデルとなるだろう。巻末には、子どもにもわかりやすい言葉で認知症についての説明があるため、相手の立場や特性(本作では認知症になった高齢者)を理解して関わることの重要性についても、気づきを促すことができると考えられる。

(3) 高齢者への敬意が描かれた絵本

ここでは、高齢者への敬意が描かれた絵本を取り上げる。

『おばあちゃんがおばあちゃんになった日』長野ヒデ子：作／童心社／2015年

あこちゃんの家には赤ちゃんが生まれてお母さんは忙しく、「そこでたよりになるのが、なんといってもおばあちゃん。」(p.2)。バットを構えるおばあちゃんのことをお父さんは「おふくろとしかからやめろよ！」と止めにかかるが、その様子を見たあこちゃんは「げんきいっぱい。」と捉えている(p.12)。おばあちゃんのいろいろな呼び方やご近所にいっぱいいるよそのおばあちゃんの姿も描かれ、「おばあちゃんみーんなすごい。おばあちゃん、ばんざーい！」(p.17)と、あこちゃんは思っている。また、「おばあちゃんいつもどっしりみんなをみまもっている。おばあちゃんありがとう。」(p.28)と思っ

交流活動を行う際には、記号としてのおばあちゃんではなく、人格をもった〇〇さんとして向き合うことが重要である。作中にはいろいろなおばあちゃんがでてくるため、絵も手掛かりにしながら、それぞれどんなところがすごいのかを考えてみたり、自分の身近にいるおばあちゃんのすごいところを考えたり、紹介しあったりすることで、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わったり、地域に親しみを持ったり（文部科学省，2018，p.62）することができるようにしていきたい。

『おばあちゃんすごい!』中川ひろたか：文／村上康成：絵／童心社／2002年

突然、園に「ひろたかなりっていう こども」を訪ねてきたおばあちゃん（p.2）は、みんなが「おばあちゃん、すごい」（p.4）と感心するくらいお手玉が上手で、昔遊びの技を次々に披露して、たちまち子ども達の人気者になる。やがて、「ひろたかなりっていうこ、えんちょうせんせいだったの?」（p.23）という事実が明らかとなり、子どもたちは「そうかあ、えんちょうせんせいも おばあちゃんからすれば こどもなんだあ」（p.23）ということに気付いて、「おばあちゃんって、すごーい!」（p.31）と感ずる。

園長先生は、保育者の中でも年長者であることが多い。なかには若い園長先生もいるだろうが、先生のリーダーであることは、子ども達も感じ取っているだろう。その園長先生を子ども扱いし、しかも遊びが上手とくれば、その人のことをすごい、と感じるのは自然なことである。保育においても、昔遊びに限らず、おばあちゃんが得意なことを生かして交流を計画し、本作を用いて活動の導入や振り返りを行うことにより、「関わることの楽しさ」（文部科学省，2018，p.191）を自覚しやすくなると考えられる。

『おばあちゃんのひみつのあくしゅ』ケイト・クライス：文／M・サラ・クライス：絵／福本友美子：訳／徳間書店／2012年／2013年

ラリーは、遠くに住んでいるおばあちゃんが遊びに来ることが「あんまり うれしく」ないが、そのことを誰にも言えずにいる（p.5）。「だい・すき・よ」という意味が込められた「ふたりだけの ひみつのあくしゅ」（p.6）にも応じはするが、心の中では「こん・なの・やだ!」「はやく・かえっ・て!」と言っている（p.19）。ところが、おばあちゃんが帰る前の晩に夏の嵐がやってきて（p.22）、「おばあちゃんは、それから ずっと、1 かげつも」ラリーの家に泊まることになる（p.24）。家を直し、まちの復興のために動くおばあちゃんのことを手伝ううちに、ラリーはおばあちゃんのが大好きになる。

ラリーのおばあちゃんは遠くに住んでいる。幼児にとって、日常的な関わりのない相手に親しみを持つことは難しく、おばあちゃんの関わり方や距離感に戸惑いを覚えるのも無理からぬことである。一方で、おばあちゃんやママの気持ちを押し量ることもできるため、邪見にすることもできない。会う度にひみつのあくしゅを求めてくるおばあちゃんだが、ラリーが「ぼく、その あくしゅは したくないの」と伝えると、「あらま、そう。わかったわ。じゃ、さよなら」と、ラリーの気持ちを尊重してくれる姿も描かれている（p.29）。高齢者と接触する機会が少なかった場合には、保育者自身も保育における世代間交流への抵抗感を覚えるケースがあるという（徳田・請川，2021）。実の祖母に限らず、高齢者とのかわりに戸惑った時に、そのような気持ちを持つことは何らおかしいことではないということ、相手を知ることに関係がよい方に変わる可能性もあることを伝えるのは、重要であると考えられ、交流に先立って読んでおきたい一冊である。

最初は、距離があったおばあちゃんとの関係が「いつも いっしょ」（p.28）にいるくらい親密なものに変わる絵本としては、他に『おばあちゃんことりと』（ベンジー・デイヴィス：作／いわじょう よしひと：訳／岩崎書店／2018年／2020年）がある。

（4）死が描かれた絵本

先述したように、幼児にとって、死を理解することは難しい。そのようななかで、絵本を通じて身近な人の死と向き合うことを疑似体験することも必要な経験と言えるだろう。ここでは、死が描かれた絵本を取り上げる。

『ばあちゃんのおなか』 かい まり：文／よしなが こうたく：絵／好学社／2020年

物語の前半は、こうたと「わらってばかり あそんでばかり。」(p.3)のばあちゃんが力いっぱい遊ぶ姿が描かれる(～p.22)。ところが、夏の終わりにばあちゃんは病気になり(p.23)、秋が深まる頃には、ばあちゃんは「ちいさな こえで ゆっくり」話すようになって(p.28)、その冬初めての雪が降った場面の後には「ばあちゃんは もう いない。」(p.31)ことが語られる。「ほくのなかで ばあちゃんは わらってばかり あそんでばかり。」で(p.32)、春、こうたが笑顔でばあちゃんを偲ぶ場面で物語は終わる。

『おばあちゃんのおくりもの』 キャリー・ガラッシュ：文／サラ・アクトン：絵／菊田まりこ：訳／WAVE出版／2017年／2018年

アリーは、「うまれたときから いつも いっしょ」(p.2)だった、おばあちゃんとおばあちゃんが「わたしのために つくってくれた ちびうさぎ」(p.3)と共にしあわせな日々を送っている。ところが、ある日、海辺に忘れたちびうさぎは「もとのすがたなんか すっかり なくなった」状態で見つかる(p.15)。「しょんぼりしている わたし」(p.16)のために、おばあちゃんはちびうさぎを直してくれたが、新しいちびうさぎは「まるで しらない うさぎ」(p.20)のようで、アリーは、ずっと一緒だったちびうさぎを柵の上に置いたまま過ごすようになる(p.22～23)。ところが、「あるひ とつぜん おばあちゃんが いなくなつて」しまい、「とても ながく、しずか」な日が続いた後(p.24)、ふと、ちびうさぎを手にとったアリーは、再び、ちびうさぎと一緒に過ごすようになる。そして、おばあちゃんが「どんなことがあっても かわらない、だいじな だいじなもの。」(表紙裏)を残してくれていたことがわかる。

『ばあちゃんのおなか』の後半では、弱っていくばあちゃんの姿とばあちゃんとの別れが描かれているが、最後のページのこうたの表情は穏やかである。『おばあちゃんのおくりもの』では、おばあちゃんとの別れを受け止め、前を向くことができるようになるまでの様子が描かれている。幼児に「死」について話す際には、死の恐怖への配慮が求められる(荃津ほか, 2009)が、生前の日常的な交流の様子から始まり、幼児自身が近親者の死を穏やかに受け止めるところまでが描かれているこれらの作品は、「死」が描かれた絵本の中でも比較的早い時期に取り上げることが可能であると考えられる。

これらに対し、主人公がおばあちゃんの死に直面するところから始まる絵本もある。

『さようなら、おばあちゃん』 メラニー・ウォルシュ：さく／なかがわ ちひろ：やく／ほるぷ出版／2014年／2014年

「おばあちゃんがね、しんじやったの」(p.2)というママの言葉から始まる本作は、おばあちゃんの死を知らされた「ほく」の死に対する疑問にママが答えていく会話形式で進んでいく。そして、ママは「ほく、おばあちゃんに なにか してあげたい」(p.35)「だけど、やっぱりかなしい」(p.38)という気持ちを受け止めながら、ほくが「たのしい おもいで」(p.40)にも目を向けられるよう寄り添っていく。

『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』 ディック・ブルーナ：ぶん・え／まつおか きょうこ：やく／福音館書店／1996年／2010年改訂

表紙には、墓標とうさこちゃんの後ろ姿が描かれている。中表紙をめくると、うさこちゃんが「おおつぶの なみだ」を流している姿が描かれ「だいすきな おばあちゃんが しんでしまったのです。」(p.2)という説明があり、眠っているように見えるが、もう息はしていないことが語られる(p.4)。そして、悲しむ家族の姿と共に、納棺(p.8～13)や告別式(p.16～17)、埋葬(p.18～19)、お墓参り(p.20～25)の様子が描かれる。

『さようなら、おばあちゃん』では葬儀の様子や墓標が、『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』では納棺や埋葬も含めたより具体的な葬儀の様子が描かれている点が、幼児向けの絵本としては珍しい。金谷・西村(2016)によれば、保護者は幼児に対するグリーフケアの必要性を認識しているが、実際に行うのは

難しいと考えているという。この理由としては、幼児の認知発達上の特性に加え、幼児が身近な人の死に直面する際には、保護者もまた、同様の経験をしている可能性が極めて高いということも関係していると考えられる。保護者が抱く人の死に直面した子どもへの対応の困難さを軽減できるように、子どもに日々関わり、子どもの理解者となれる者が子どもと接しながらできる支援を保護者と相談しながら行っていくことも重要である（金谷・西村，2016）ことを踏まえると、葬儀の様子を扱った絵本については、必要に応じて、個別に紹介するのがよいのではないだろうか。

4. 全体的考察

本研究では、(1) 高齢者との対等な関係を中心に描かれた絵本、(2) 高齢者の役に立つ経験が含まれる絵本、(3) 高齢者への敬意が描かれた絵本、(4) 死が描かれた絵本の順に、絵本の概要に触れながら内容分析を行い、その特徴を明らかにするとともに、幼児が高齢者に親しみを持つことにつながるような保育での生かし方について検討を行った。

その結果、絵本との出会いが、祖母に対して親しみを持つことや、高齢者から昔の話を聞いてみようとする意欲につながる可能性が示された。加えて、目的に応じて絵本を選ぶことにより、主人公の高齢者との関わり方をモデルとしたり、相手の立場や特性を理解して関わることの重要性に気付いたりするなど、物語を通じた疑似体験からの学びも期待できることが確認された。これらのことから、絵本を実際の交流活動と往還させながら用いることが、高齢者との触れ合いの中で得られる気付きの質を高めることにつながると言えるだろう。

実際に交流を行うと、幼児が高齢者からの反応に戸惑う場面もあることが予想される。自分の気持ちと向き合う際に、絵本を用いて互いの立場を客観的に捉える機会を設けることが交流継続の助けとなる可能性があることから、幼児の気持ちを代弁し、高齢者への理解を促してくれるような絵本については、一斉的な活動の場で読み聞かせるだけでなく、いつでも手に取れるような状態にしておくのがよいだろう。

また、保育の中で身近な人の死を扱った絵本を取り上げる際には、家庭と連携しながら進めることが重要であること、そのような絵本は、近親者の死に直面した保護者が幼児に対してグリーフケアを行う際にも役立つことが示唆された。特に後者の場合、保護者自身もケアが必要な状態にあることが予想されることから、関連する絵本は、貸出可能であることが望まれる。

最後に、今後の課題について述べる。本研究では、幼児が高齢者に親しみを持つための絵本の活用について論じてきたが、保育での生かし方を提言するに留まっている。今後は、実際の交流活動を通じた高齢者に対する幼児の認識の変容プロセスや望ましい援助の在り方について明らかにしていきたい。

引用文献

- 青木聡子（2022）幼児と高齢者の交流における絵本の活用についての一考察 初等教育論集（国士舘大学初等教育学会）(23),80-93.
- 秦 暁子・高橋香子・坂本祐子・和田久美子（2021）乳幼児期の孫育てをする祖父母が認識している日常生活の変化 母性衛生 62 (1), 52-59.
- 日出幸昌江・天富美禰子（2003）子育てにおける祖父母世代の参加—幼老共生の暮らしに向けての考察— 大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門：社会科学・生活科学 51 (2),139-152.
- 板野美佐子・花谷香津世・奥山清子（1996）母親が見た幼児と祖父母の交流 川崎医療福祉学会誌 6 (1), 63-71.
- 金森由華（2012）高齢者と子どもの世代間交流：交流内容を中心に 愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇 (2), 69-7.
- 金谷雅代・西村真実子（2016）子どもへのグリーフケアに関する親の認識と実践の現状と困難性 石川看護雑誌（石川県立看護大学）13,75-84.
- 今野和夫（1982）子どもと老人—幼児教育における祖父母の役割—秋田大学教育部研究紀要 教育科学 32,42-55.
- 茎津智子・小林千代・井上由紀子・岩本喜久子・岡田洋子・工藤悦子（2009）小学生をもつ親が子どもと「死」につい

- て話すことの意識と実態 天使大学紀要 9,81-92.
- 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領解説平成30年3月 フレーベル館.
- 諸井泰子・並木真理子・富岡麻由子・杉本 信(2013) 子育てにおける世代間交流の実態:農村地域の高齢者が望む乳幼児と保護者との交流 有明教育芸術短期大学紀要(有明教育芸術短期大学学術情報委員会) 4,49-57.
- 内閣府(2018) 高齢社会対策大綱 https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/pdf/p_honbun_h29.pdf (2022年12月3日アクセス)
- 並木真理子・杉本 信・富岡麻由子(2013) 祖父母世代が望む地域の子育て世代との交流:都市地域と農村地域との比較を通して 乳幼児教育学研究(22),77-88.
- 杉本陽子(2001) 子どもの「生と死」に対する認識 日本健康医学会雑誌 10(1),2-11.
- 徳田多佳子・請川滋大(2021) 幼児と高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科(27),165-173.
- 富岡麻由子・杉本 信・並木真理子・諸井泰子(2012) 子育て世代が望む地域の祖父母世代との交流 乳幼児教育学研究(21),1-9.
- 吉村智恵子・望月久乃(1991) 幼児の老人観(1):特に祖母イメージについて 名古屋女子大学紀要 人文・社会編 37,105-114.